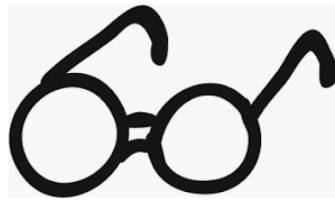


坂口安吾と「蒲田の家」

新倉 太郎



蒲田区安方町127番地 「蒲田の家」跡

作家・坂口安吾は昭和五年（一九三〇年）から約二〇年間、矢口の家で過ごした。この家について、文学史的には坂口安吾の「蒲田の家」という。

昭和初期の矢口は、蒲田区のはずれ、多摩川に近く、田畑が広がり、東京の人々にとつての別荘地帯であり、また小さな工場が点在する田園地帯だった。また隣の地区になるが、新田には三業地があった。

坂口家の家としてこの場所にずっとこの家はあった。安吾はしかし、この「蒲田の家」にずっと住んでいたわけではない。大森や堤方町のアパートに住んでいたり、本郷菊坂富士ホテルにしばらく滞在したり、はたまた京都、取手、小田原、伊東……。さまざまな場所に滞在し、住んでいた。まさに根無し草、という表現がぴったりの安吾なのである。

それでもこの蒲田の家で安吾は作家として最初のキャリアを踏み出したことは間違いない。昭和五年三月に東洋大学印度哲学倫理学科を卒業し、五月に蒲田の家に移住した。翌昭和六年に『風博士』を発表し、新進ファルスカとして文壇に登場する。

「ファルス」って？ 安吾曰く「ファルスとは、否定を

も肯定し、肯定をも肯定し、さらに肯定し、結局人間に関する限りの全てを永遠に永劫に永久に肯定肯定肯定して止むまいとするものである」『ファルスに就いて』昭和七年）と。

喜劇や悲劇と同じように表現のひとつのジャンルとしてファルス（道化）がある。

そんな明るいイメージの安吾であるが、この時期の安吾は実に精神的に追い詰められていた。最も大事な友人の長嶋萃を病気で失い（昭和九年）、よき理解者だった牧野信一が自殺し（同一年）、四年間交際していた矢田津世子と別れる（同一年）。それでも安吾は書くことと呑むことだけはやめなかった。

そして時代は戦争へと突き進み、安吾はこの蒲田の家で昭和二〇年四月一五日の城南空襲をむかえ撃ち、立派にこの家を守った。

『墮落論』『白痴』『不連続殺人事件』など、安吾をして一躍時代の寵児たらしめた諸作品は、この蒲田の家で生まれた。そして梶三千代と結婚して、新婚生活を営んだのもこの蒲田の家だった。しかしそれは、すべて戦後、昭和二年（一九四六年）以降のことである。

安吾が棲んだ「蒲田の家」。現在は、残念ながら当時の面影すらない殺風景な駐車場になっている。

参考文献…月刊「東京人」一九九五年八月号 特集 安吾のいる風景